

金田官衙遺跡 国史跡指定二〇周年記念

中根・金田台地区の遺跡

入場・参加無料

令和6年度文化財巡回企画展

期間 令和6年10月5日(土)～令和7年2月2日(日)

時間 9:00～16:30

休催日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日)、祝日の翌日(土曜日及び日曜日を除く)、12月28日～1月4日。

会期1 谷田部郷土資料館(谷田部交流センター3階)

令和6年10月5日(土)～令和6年11月24日(日)

会期2 小田城跡歴史ひろば案内所

令和6年12月5日(木)～令和7年2月2日(日)

体験講座 桜地区歴史ウォーキング

日時 令和6年11月23日(土) 10:00～12:00

集合 桜歴史民俗資料館(桜窓口センター併設)

定員 市内在住・在勤・在学者30名程度
(応募者多数の場合は抽選)

応募 11月10日(日)までに、いばらき電子申請による申し込み、又は往復はがきに、住所・氏名・年齢・電話番号・「体験希望」と記入し、つくば市文化財課宛てに郵送(当日消印有効)。

講演会 「常陸の古代道路と郡家・郡寺について」

日時 令和6年12月21日(土)

14:00～16:00 (13:30開場)

会場 つくば市役所会議室201 ※要約筆記あり

講師 黒澤彰哉氏(元茨城県立歴史館 史科学芸部長)

定員 約120名 当日受付(事前申込不要)

主催 つくば市教育委員会

問合せ つくば市教育局文化財課

〒305-8555 つくば市研究学園一丁目1番地1

☎029-883-1111(代表)

<http://www.city.tsukuba.lg.jp>

歴史・文化財

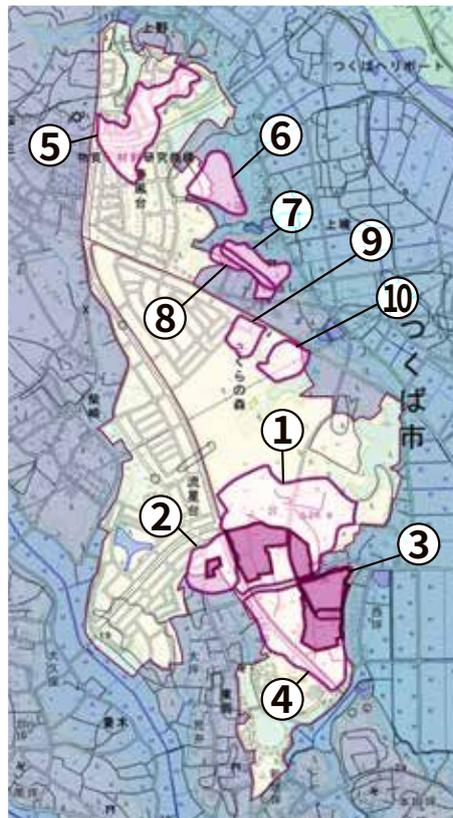


左上、右下:金田西坪B遺跡遠景 右中:金田官衙遺跡遠景
左下:上野古屋敷遺跡全景(写真提供:茨城県教育財団)
背景:国土地理院地図、および国勢調査小地域境界データをQGISを用いて3D化

はじめに

つくば市東部の桜地区に位置する中根・金田台地区は、つくばエクスプレス沿線開発が進み、市内でも人口が増加している地域の一つです。区域内にはつくば市の歴史を物語る遺跡が数多く所在しており、造成工事が行なわれる場所は、事前に発掘調査が行なわれました。そのような中で、奈良・平安時代の常陸国河内郡役所跡とされる金田官衙遺跡は、古代地方行政組織を考えるうえでの重要性や、歴史的価値の高さから、平成16年(2004年)2月に国の史跡に指定され、北東側に広がる豊かな自然や生態系とともに保存されています。

この企画展では、国史跡指定20周年を迎えた金田官衙遺跡をはじめとした、中根・金田台地区の旧石器時代から中世までの遺跡を紹介します。



主に紹介する遺跡

国指定史跡
 金田官衙遺跡

- ① 金田西遺跡
- ② 九重東岡廃寺
- ③ 金田西坪A遺跡
- ④ 金田西坪B遺跡
- ⑤ 上野古屋敷遺跡
- ⑥ 上境作ノ内古墳群
- ⑦ 上境滝の台古墳群
- ⑧ 上境滝ノ臺遺跡
- ⑨ 上境旭台貝塚
- ⑩ 中根中谷津遺跡

※国土地理院地図、および国勢調査小地域境界データをQGISを用いて作図



金田官衙遺跡

1 金田官衙遺跡

金田官衙遺跡は、奈良・平安時代の常陸国河内郡役所跡と考えられる金田西遺跡・九重東岡廃寺・金田西坪B遺跡のそれぞれ一部と、金田西坪A遺跡から成る国指定史跡の名称で、中根・金田台地区の南側に所在しています。

▼文献から見る河内郡

律令制度のもとでは、常陸国(茨城県の大部分)は11の郡に分かれていました。河内郡の郡域は諸説ありますが、つくば市の南側やつくばみらい市、さらに牛久市や龍ヶ崎市の一部を含む範囲と考えられています。

当時の常陸国の様子を知る史料として、奈良時代初期に成立した『常陸国風土記』が挙げられますが、河内郡の記述はすべて失われており、隣接する筑波郡・信太郡の記述にわずかに名称が登場するのみです。『常陸国風土記』や逸文によると、孝徳天皇の時代(在位645～654)に、国造が治めていた新治・筑波・茨城・那賀・久慈・多珂の6つの国が評(郡)として編成され、「常陸国」となりました。その後、信太郡・行方郡・香島郡などが新たに分割されます。河内郡もこのころ筑波郡から分かれた可能性が考えられます。また、平安時代の『倭名類聚抄』によると、河内郡には嶋名・河内・大山・八部・真幡・菅田・大村の、七郷があったことが確認されます。



奈良時代の常陸国と郡 ※『新編常陸国誌』の「和銅中十壹郡図」を元に作図

- 凡例**
1. このパンフレットは、令和6年度文化財巡回企画展「中根・金田台地区の遺跡」の展示内容を解説するものです。
 2. 写真や遺物の所蔵者・提供者を表記しており、表記のないものはつくば市教育委員会の所蔵です。
 3. 実施にあたり、以下の方々の御指導・御協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。
 茨城県埋蔵文化財センターいせきびあ茨城、黒澤彰哉氏、公益財団法人茨城県教育財団、下野市教育委員会、筑波大学、取手市教育委員会(50音順)

▼発掘成果から見る河内郡

金田官衙遺跡は、郡庁ぐんちようなどの政治・儀式の場とされる官衙域、大溝で区画された正倉院域、郡寺と考えられる廃寺域から成ります。

河内郡衙が成立したのは右の表のⅡ期と考えられています。Ⅱ期は、九重東岡廃寺からは基壇跡きだんが、金田西遺跡からは四面廂しめんびさしの掘立柱建物跡が確認されます。Ⅲ期になると、廂しょうのついた建物や正倉が建てられ、郡衙として機能・環境が整います。Ⅴ期以降は郡衙が衰退し、終焉を迎えてからは、小規模な集落が営まれていたことが分かりました。

河内郡衙の様子は、文献などの文字情報からは知ることができませんが、発掘調査の成果からその様子を窺い知ることができます。

時期区分	年代	推定される河内郡衙の変遷
I期	～8世紀初頭	前身となる小規模集落の所在が確認される
II期	8世紀前葉	河内郡衙・九重東岡廃寺の成立
III期	8世紀中葉	郡衙の展開期(環境・機能の整備)
IV期	8世紀後葉	郡衙の展開期～衰退期
V期	9世紀前葉	郡衙の衰退期

2 金田西坪B遺跡

▼有力者の住まいの発見か？

平成29年(2017年)の調査で、奈良時代の竪穴建物跡や、掘立柱建物跡が確認されました。建物を建替えながら、倉庫などを整備していく様子が分かります。

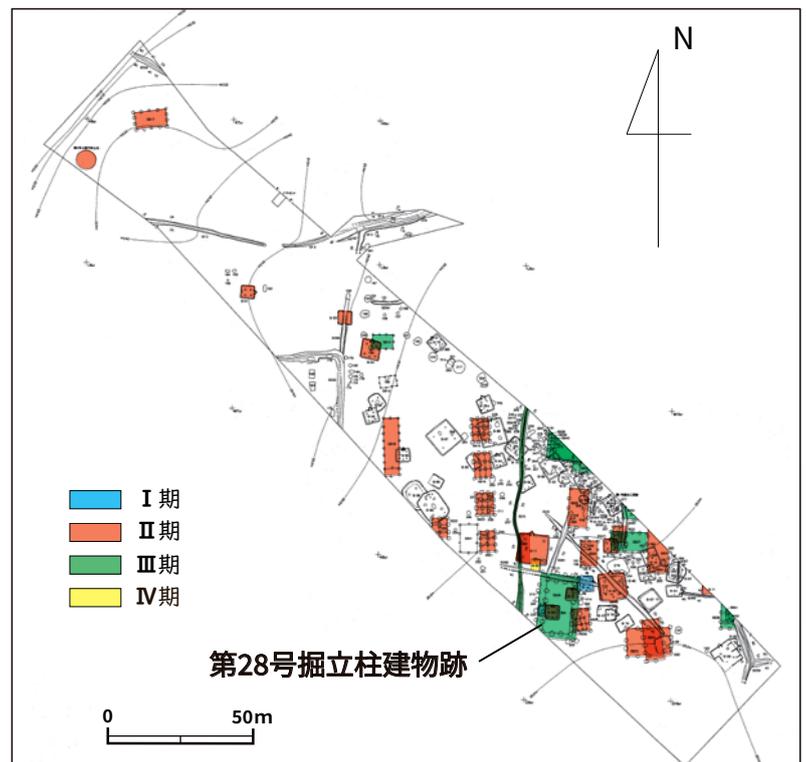
I期の段階でも竪穴建物跡が見つかりましたが、郡衙成立期にあたるⅡ期には、大型の竪穴建物跡・掘立柱建物跡が群を成すなど、他とは違った様相が見られます。大型竪穴建物跡は有力者の住まいの跡と考えられています。また、これに付随して高床倉庫跡4棟が発見されています。この時期の間に順次増築されており、有力者の財力を窺うことができます。

▼大型の四面廂付建物しめんびさし

Ⅲ期には竪穴建物跡は見られず、掘立柱建物跡のみが見られます。中でも、有力者の住まいと考えられる大型掘立柱建物跡の発見が注目されます。

第28号掘立柱建物は、桁行5間・梁間3間の四面廂けいたゆき けん はりまのついた建物で、廂を含めると桁行18m(60尺)、梁間7.2m(24尺)と大型のものです。また、この建物の北側には掘立柱建物跡数棟が確認されており、東側には建物跡がない空間が存在しています。これらの建物群は、金田官衙遺跡のⅢ期と同時に存在することとなります。その大きさや郡衙の最盛期と重なることから、郡司層の居宅跡ではないかと考えられています。

その後のⅣ期に確認されたのは竪穴建物跡1棟のみで、この頃には居宅は別の場所へ移ったようです。金田官衙遺跡を考える上で、新たな知見が得られた成果と言えます。



金田西坪B遺跡遺構変遷図 (茨城県教育財団 2021 をもとに作成)



第28号掘立柱建物跡 (提供: 茨城県教育財団)

3 旧石器時代の遺跡



台形様石器とナイフ形石器 上境滝の台古墳群 (提供: 茨城県教育財団)

▼ 市内最古級の石器群－上境滝の台古墳群－

約800点の石器が6箇所から見つっています。このうちの5箇所の石器は、出土した地層やその種類等から、市内でも最古級の3万4千年前頃のものと考えられます。

石器からは、珪質頁岩やガラス質黒色安山岩などの小型の礫、中型・小型の剥片(かけら)から、より小型の剥片を打ち割っている様子が窺えます。定型的な製品を作るというよりは、剥片の縁を刃としてそのまま利用したり、適当な形の剥片から製品を作ったりしていたと推測されます。石器に使われている石は、栃木県で多く採集できるもので、これらの石器を残した人々は、同方面から移動してきたのかもしれませんが。

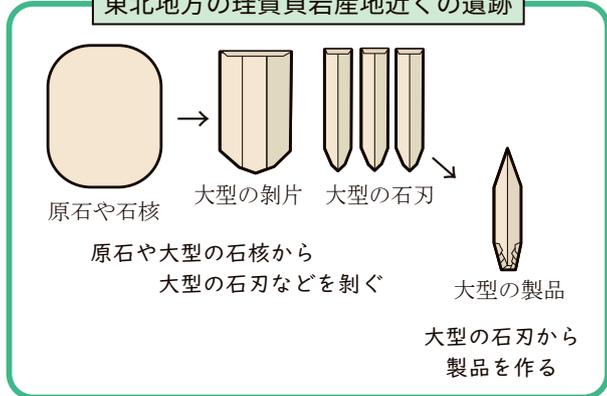
▼ 東北と関東を行き来した人々－上境旭台貝塚－

南北18.3m、東西10.9mの範囲から92点の石器が出土しています。3万2千年前頃のものと考えられ、東北地方の珪質頁岩が多く使われています。出土した石器からは、珪質頁岩の大型の石刃(縦長の剥片)を遺跡に持ち込み、石刃から作った製品を使ったり、石刃から小型の剥片を打ち割って製品を作ったりしている様子などが窺えます。大型の石刃は持ち運びしやすいとともに、製品に加工しやすく、またそれを打ち割れば小型の製品の材料を作り出すこともできます。当時の人々は、石器に適した珪質頁岩を、産地周辺において大型の石刃や製品にし、長い旅の中でも道具やその材料に困らないよう、それらを携えた上で、東北地方と関東地方東部の遠距離を移動する生活を送っていたと考えられます。



東北産の珪質頁岩を主体とした石器群 上境旭台貝塚 (提供: 茨城県教育財団)

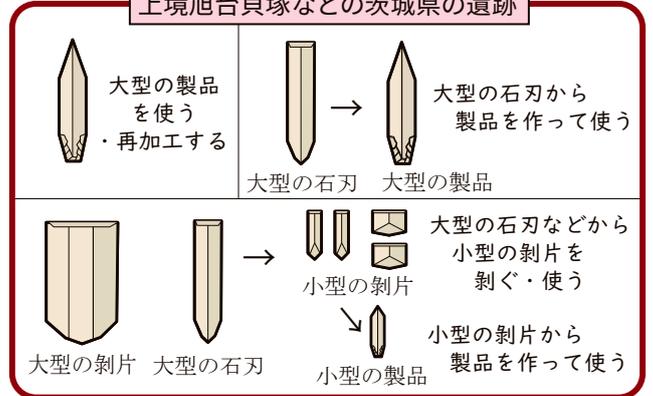
東北地方の珪質頁岩産地近くの遺跡



大型の石刃や製品などを 持って移動



上境旭台貝塚などの茨城県の遺跡



東北産の珪質頁岩の利用(イメージ)

4 縄文時代の遺跡

▼ 上境旭台貝塚と中根中谷津遺跡

上境旭台貝塚と中根中谷津遺跡では、縄文時代後期・晩期の遺構が数多く見つかリ、大量の遺物が出土しました。中でも両遺跡の間に位置する谷の調査では、後期前葉(約4千年前)の頃の地層から、水場の利用を窺わせる土坑や木道などの遺構が見つかリ、縄文人の技術の高さを教えてくれる美しい漆器などが出土しました。以下、この頃の遺構や遺物、それらから考えられる当時の生活などを紹介します。

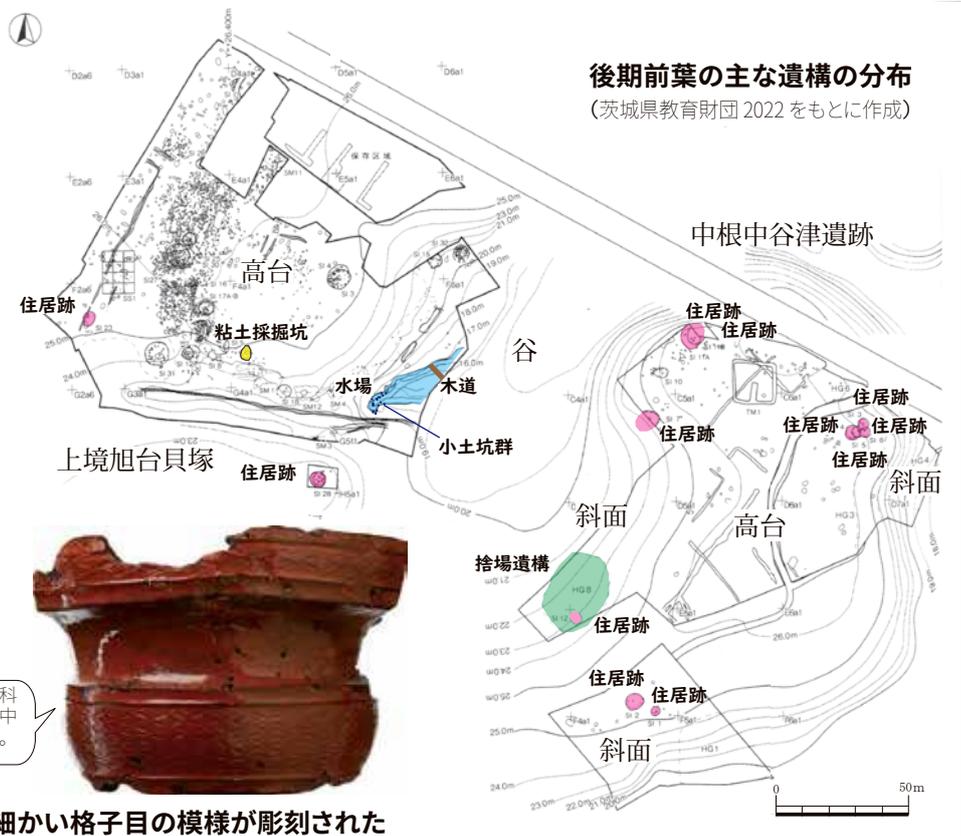


谷で見つかった木道と木 上境旭台貝塚 (提供: 茨城県教育財団)

▼谷で見つかった遺構

谷の奥に当たる場所で小さな土坑17基、少し離れた場所で木道2基が見つかりました。土に含まれていた珪藻化石から、これらの遺構が見つかった場所は、はじめ湿地のような環境でしたが、しだいに乾いた状態に変化していったことが分かっています。土坑は湿地のような環境の時期に湧き水を利用するために掘られたもので、木道は少し乾いた状態になった時期に敷かれたものと考えられています。木道2基は、新しいものの下から古いそれが見かけていて、作り直されたことが分かります。

※模様の特徴や自然科学分析からは、後期中葉のものと考えられます。



細かい格子目の模様が彫刻された
漆器鉢 上境旭台貝塚 (提供: 茨城県教育財団)

▼漆器の製作

土坑や木道の周辺からは、土器や石器とともに、台地の調査では見つかりにくい木製品や漆器、編組製品などが出土しています。漆器には、鉢や杓子、装飾された弓などがあり、中には細かい格子目状の模様を彫刻し、黒い漆の上に赤い漆を何回も塗り重ねた木製の鉢もあります。作りかけの木製品や漆を入れた容器、赤色の顔料を作るのに使った磨石などが見つかることから、ムラの中で漆器の製作が行われていたと考えられます。

▼クリヤトチノキの林

谷の土に含まれていた花粉や出土した木からは、谷付近が、コナラ亜属やクリ、クルミ属の林からクリ林へと変化し、さらにトチノキが多く生える林へと変わったことが分かっています。ニワトコなどの食用の植物遺体も見つかることから、谷周辺には人によって管理された林があったと考えられています。

▼竪穴住居跡と捨て場遺構

上境旭台貝塚と中根中谷津遺跡からは、竪穴住居跡12軒が見つっています。住居跡は、谷や低地に面した台地の縁に分布しています。中根中谷津遺跡の南西斜面からは、土器片が大量に出土しており、土器などの捨て場であったと考えられています。



ハート形土偶 中根中谷津遺跡

▼東北地方との交流

谷からは、東北地方北部の十腰内式土器とされる破片が出土しています。また、谷や中根中谷津遺跡からは、ハート形土偶が見つっています。同土偶は、東北地方南部で作られ始め、やがて関東地方へ広がったとされています。これらの遺物からは、東北地方との交流の様子が窺えます。

▼ムラ周辺での人々の暮らし

調査結果から想定される、後期前葉の頃のムラ周辺での暮らしを以下に記します。住居は谷や低地を望む台地の縁に建てられ、斜面の一部には不要となったものを捨てる場所が設けられました。谷に近い斜面では、クリヤトチノキの林が管理され、食用の植物などが生えていました。谷では湧き水が利用され、谷を横断するための木道も設けられていました。谷のより低い場所には、クリヤトチノミの灰汁を抜くための施設があったかもしれません。ムラでは、木製品や漆器の製作が行われ、粘土を掘り出すための穴も見つかることから、土器づくりも行われていたと考えられます。

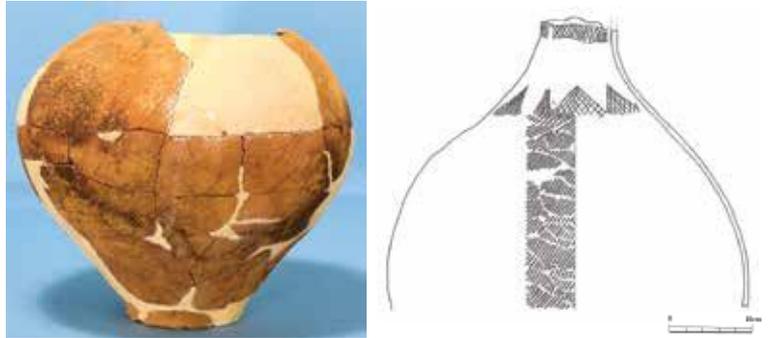
5 やよい 弥生時代の遺跡

▼遺跡の様相

茨城県南部は、県北部などの他地域に比べると弥生時代の遺跡の分布が少ない地域です。しかし、中根・金田台地区の上境滝ノ臺遺跡や上野陣場遺跡では、弥生時代の集落跡が調査されており、弥生時代の土器棺墓も発見されました。県南部では数少ない弥生時代遺跡が中根・金田台地区周辺で複数確認されていることは、その後のこの地域の歴史を考えるうえで注目されます。

▼上境滝ノ臺遺跡の土器棺墓

上境滝ノ臺遺跡で発見された土器棺墓は、二つの壺の破片を棺として埋葬したもので、土坑から横になった状態で出土しました。棺本体には壺の上半部を用い、欠失した下半部を別の壺の下半部の破片で覆い、蓋としています。棺本体の頸部下に施された三角形の文様から、弥生時代後期中頃(2世紀頃)に作られた土器と考えられています。



土器棺墓(左:蓋, 右:身) 上境滝ノ臺遺跡 (筑波大学所蔵)

上野陣場遺跡の土器棺墓は、土坑から横になった状態で下半分のみが出土しました。壺を転用したもので、底部には穴があげられています。弥生時代後期後半(3世紀頃)に作られたと考えられています。

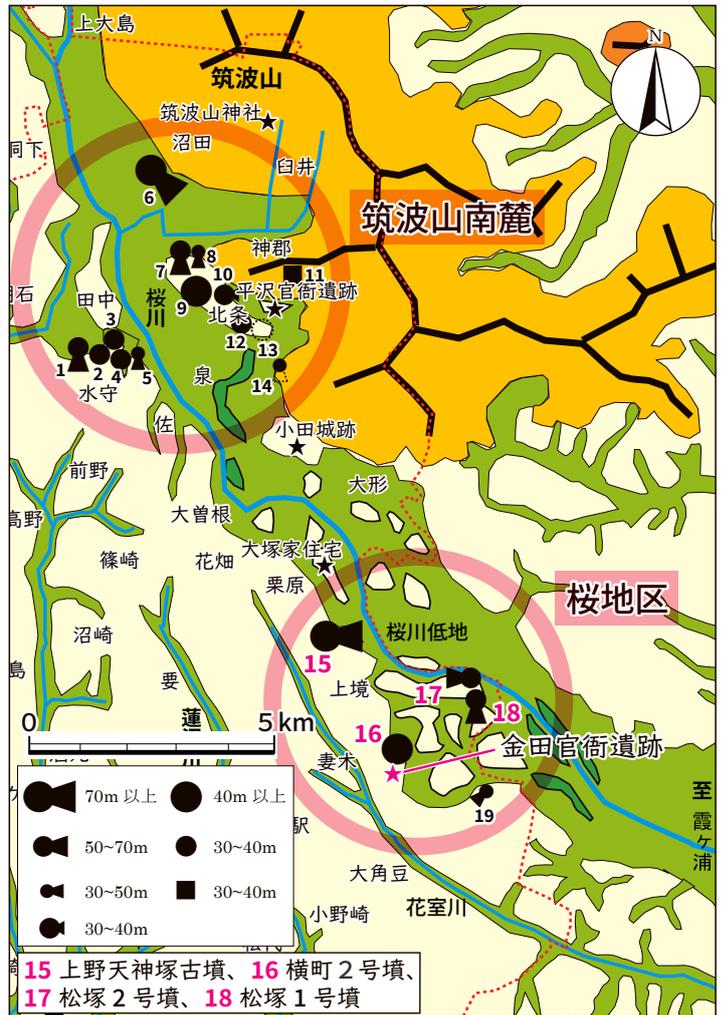
▼土器棺墓に埋葬された人々

土器棺の容積は非常に小さいため、埋葬された人については、乳幼児であったという説と、一度遺体を白骨化させてから棺に収めたという説がありますが、人骨が土器棺内で見つかることは珍しいため、詳しいことは分かっていません。弥生時代の茨城県南部では、西関東以西で弥生時代にみられる方形周溝墓は造られておらず、このような土器棺墓が弥生時代の墓制として知られています。古墳時代前期(4世紀頃)になると古墳という新たな墓制が出現しますが、一方で引き続き土器棺墓が営まれる事例もみられます。古墳時代にも弥生時代の伝統が根強く継承されていたことが窺えます。

6 古墳時代の遺跡

▼つくば市内の大型古墳の分布

つくば市内では、様々な形や大きさの古墳が400基以上確認されています。それらの中でも、大型の古墳が特に集中する地域は、筑波山南麓と桜川右岸の桜地区で、ともに古墳時代には中核的な地域であったといえます。また、古墳が造られなくなった後の8世紀には、それぞれの地域内に筑波郡衙、河内郡衙が造営されており、古墳時代に形作られた地域の基礎が、奈良時代に引き継がれたことを物語っています。



つくば市内桜川流域の主要古墳の分布

▼桜地区の大型古墳

桜地区の大型古墳は、中根・金田台地区内やその周辺に多く所在しています。発掘調査されたものはありませんが、4世紀の上野天神塚古墳(前方後円墳・墳丘長約80m)、6世紀の松塚1号墳(前方後円墳・62m)・2号墳(前方後円墳・57m)は、墳丘の形の特徴等からおおよその築造年代がわかります。また、横町2号墳(円墳・50m)は時期が不詳ですが金田官衙遺跡の至近にあり、古墳と郡衙との関係が注目されます。

▼上境滝の台古墳群の人物埴輪

上境地内やその周辺には、30m以下の中小規模の古墳からなる上境滝の台古墳群・上境作ノ内古墳群が所在しており、6世紀頃の埴輪が多く出土しています。

上境滝の台古墳群では、古くから耕作等に際して埴輪が出土していました。それらのうち人物埴輪は、顔や台部の作り方が取手市市之代3号墳出土のものと同細部まで共通しており、製作者が同じと考えられる貴重な事例となります。また、両古墳の埴輪には、材料の粘土に筑波山系の岩石に由来する雲母の破片が多く含まれており、筑波山地南麓で作られたものが遠くまで運ばれていたことがわかります。

▼上境作ノ内遺跡1号墳の機織形埴輪

上境作ノ内1号墳では、全国で3例目となる機織形埴輪が出土しました。一部の破片のみですが、経系の上げ下げを操作する足紐の表現があることから、地機を象った埴輪と特定されました。機織機を用いた布の生産は、実際に当地で盛んであったと考えられますが、機織りは日本神話にも多く登場しており、古墳祭祀においても重要な意味があったのかもしれません。



左 上境滝の台古墳群出土の人物埴輪
右 取手市市之代3号墳出土の人物埴輪
(取手市教育委員会所蔵)

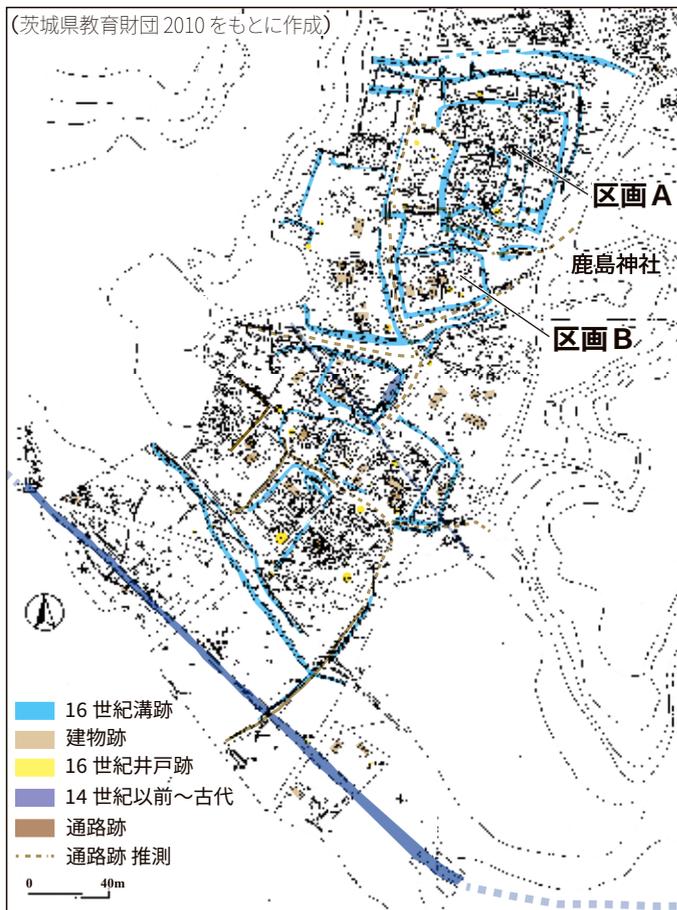
7 中世の遺跡

▼戦国時代の集落跡～上野古屋敷遺跡

中世の集落の多くは、現在の集落と同じ場所にあると考えられるため、遺跡として認識できるのは、何らかの事情で集落が移転した場合に限られます。上野古屋敷遺跡は、「古屋敷」の地名が残る場所から発見された、戦国時代を中心とした集落跡です。集落の一部ではなく、ほぼ全面的に調査された貴重な事例です。

▼戦国時代集落の全貌

上野古屋敷遺跡の中世集落跡は、桜川右岸の谷津に挟まれた、標高24～28m程の細い台地上に位置します。集落跡は南北を溝で区画しており、南北約300m、東西約150mの規模です。使用時期は、15世紀中頃から16世紀までで、江戸時代に入る頃には、墓地のみを残して人々の暮らしはなくなりました。集落内は縦横に掘られた溝によって複雑に区画され、その区画された空間が、一つの屋敷地となっていました。屋敷地の間は、通路になっており、調査前の道路と重なる部分が多くあります。



上野古屋敷遺跡 16世紀頃の中世集落跡全体図 (1:4000)

▼集落に暮らした人々

特殊な出土遺物が確認されないことから、農業を主体とした一般的な集落跡と思われます。区画は1,000~1,300㎡程度で、内部は簡素な掘立柱建物数棟と井戸などで構成されていたと思われます。集落跡の北端には60m四方、面積3,600㎡の最も大きな区画(A)があり、その南に東西50m、南北30m、面積1,500㎡の区画(B)があります。いずれの区画の溝跡も出土遺物が多く、これらが集落内の有力者(土豪層)の屋敷であった可能性があります。

▼集落の人々の生活道具

上野古屋敷遺跡の中世集落跡からは、土器の皿、鍋、播鉢、甕が多く出土しています。この頃の領主の城館跡では、鉄鍋や陶磁器の碗・皿・播鉢・甕もある程度出土しますが、集落では圧倒的に土器が主体でした。集落内北側の大きな区画溝跡等からは、国産陶器(古瀬戸、大窯、常滑、唐津)や、極少量の貿易陶磁器(青磁、白磁、青花)も出土しましたが、床間に飾るような高級品はありませんでした。ただし、茶臼や湯釜、天目茶碗なども出土しており、有力者はお茶を楽しんでいたかもしれません。



上野古屋敷遺跡中央部空撮 (提供:茨城県教育財団)



お茶関係出土遺物 上野古屋敷遺跡

おわりに

中根・金田台地区は、現在に至るまでの長い間、人々の生活の舞台であり、地下に多くの遺跡が残されてきたことが分かりました。現代に住む私たちには、歴史を物語る遺跡を未来へ伝えていく責務があります。つくば市教育委員会では、今後も発掘調査で得られた多くの資料の公開をして、遺跡の大切さを伝えていきます。



金田官衙遺跡遠景 (提供:茨城県教育財団)

主要引用・参考文献

- ・茨城県教育財団 2002年『上野陣場遺跡』第182集
- ・茨城県教育財団 2003年『金田西遺跡・金田西坪B遺跡・九重東岡廃寺』第209集
- ・茨城県教育財団 2007年『上野古屋敷遺跡1』第285集
- ・茨城県教育財団 2008年『上野古屋敷遺跡2』第307集
- ・茨城県教育財団 2009年『上野古屋敷遺跡3』第324集
- ・茨城県教育財団 2010年『上野古屋敷遺跡4』第334集
- ・茨城県教育財団 2013年『中根中谷津遺跡2』第367集
- ・茨城県教育財団 2021年『金田西坪B遺跡2』第449集
- ・茨城県教育財団 2021年『上境滝の台古墳群・上境作ノ内遺跡2・上境作ノ内古墳群』第450集
- ・茨城県教育財団 2022年『上境旭台貝塚5』第459集
- ・豊崎卓 1970年『東洋史上より見た 常陸国府・郡家の研究』山川出版社
- ・取手市教育委員会 1978年『市之代古墳群第3号墳調査報告 付 取手市分布調査報告』
- ・赤坂亨 2001年「つくば市上境発見の弥生土器棺墓」『先史・考古学研究』12
- ・黒澤彰哉 2017年『ヤマトタケルと常陸国風土記』茨城新聞社
- ・茨城県教育財団 2018年『研究ノート』第15号
- ・岩宿博物館 2022年『岩宿フォーラム2022・シンポジウム 東北頁岩と北関東地方予稿集』
- ・黒澤彰哉 2023年「古代筑波郡における後期・終末期古墳の諸相(前編)上境作ノ内古墳群の分析から」『茨城県考古学協会誌』第35号
- ・黒澤彰哉 2024年「古代筑波郡における後期・終末期古墳の諸相(後編)上境作ノ内古墳群の分析から」『茨城県考古学協会誌』第36号